

樹氷再生に向けてオオシラビソの球果を採取しました

令和4年9月26日(月)、山形市の蔵王ロープウェイ樹氷高原駅近くの蔵王温泉スキー場ユートピアゲレンデ付近で、樹氷再生に向けてオオシラビソの球果を採取しました。

激しい虫害によりオオシラビソが消滅し親の世代からの種子の供給が見込めない地蔵山頂付近では、種子や稚樹を導入して次世代のオオシラビソ林の再生を図る必要があります。一方、オオシラビソは、一昨年は、ほとんどの木で着果しないなど、年により豊凶があるため、着果の機を捉えて種子を得ておく必要があります。今年に着果の状況は、昨年よりも良好と見られ、オオシラビソ林の再生に向けた取組に備え球果を採取することとしました。このような取組は、自然公園法に基づく許可を得て6年前(2016年(平成28年))から始めています。

マツ科の植物であるオオシラビソは、アカマツやクロマツと同様に、球果(いわゆる「まつぼっくり」)を実らせ、1つの球果の中には、かなりの幅はあるもののおよそ300粒の種子が入っています。1本当たりの球果の数もまちまちではありますが、10個から50個、特に多いものでは100個近くついているようです。球果は乾燥が進むと、球果の鱗片(ウロコのような形状)が開き、隙間から「翼」がついた種子が飛散してしまうため、種子を効率的に得るには、球果の乾燥が進む前に採取する必要があります。

着果の位置は木の上部であるため、先端に刃物を取り付けた長さ12mほどの竿を使って球果を採取しました。山形県みどり自然課を通じてお声がけいただいた地域の関係者の皆様にも参加いただき、当日はおよそ50個ほどの球果を採取しました。採取した球果は、オオシラビソ林の再生に向けた取組に備え、以前から冷蔵保管していただいている山形県森林研究研修センターにお届けしました。

